

ふ。醉狂奇態なども見えてゐる。石曼卿の詩句に「醉狂勁鶴舞。寃獨平家物語寶永七年刊(卷之四)空鶴は比叡の雲鶴の條に「酒に醉ものはあれども、菓子に醉狂する例なし。」

ずるさう 色よき娘を人身御供に取らざれば一在所崇をなす、其臉には山うつぎの折枝が鳴渡つて棟木に立ち、家の柱より血しほ流れ出づ、其瑞相には前方に必ず取らるべき娘が熱病を病む別知らせあり(振袖也) 道に背く無分別、追付獄門の相伴せんずる瑞相、ええ笑止な(聖女)

瑞相吉兆を云ひ、轉じて前兆の意に云ふ。平安城(古淨瑠璃)第一に「三人の逆臣撥ひ起り、我君を犯すべき瑞相、アア恐るべし。」

ずるざん 小倉彦九郎が女房なるぞ、推參な事をして必ず我を恨みやるな(堀川波敷) これ從次郎殿、理非はともあれ、兄御に向つてげか(げ統天皇)

ずるしやうりん 水精輪の地をならし(松風)

水精輪水晶で成れる輪寶。
ずるじん (本領曾我)

番長一人近衛六人である。大納言大將は隨身六人、即ち番長一人近衛五人である。中納言大將より少將は衛尉長一人隨身四人或は二人である。隨身の装束は概して冠・襦袢・袴を着け、弓筋を帯し大刀を佩いた。

ずるむ 不思議の瑞夢を感じて「用明天皇」この邪法國に起り日月の翼を踏折れば、王法忽ち覆り地に墮つる瑞夢ならずや(徒合歌)

ずるりん 地に水輪あり、星に水曜北方一徳の水あり(縁鏡天皇)

ずるつむはな 名に立つ末のと言置きし、末摘花の間の雪(冷泉節)

すあつむはな 末摘花は紅の花用明天皇 末つむは花の染衣も、心うつらず照手の姫(小栗判官)

すずかふ そばから喧嘩のすをかふも、これ堪忍のせこしなる(感)



勝し挑む。いらざる世話をやいて人の氣を損せしめる。此方より事をかけて怒らしめる。按じらるに「すは、謙すの」すは、かふは「そむかふ」その條を見よ)などいふ「かふ」と同じ語で、挑む意(一説に論語「公冶長篇に「子曰、孰謂微生高直、或乞之醢焉、乞諸其鄰而與之」とあるより出た語である)といふ。鴨長明の歌に「酒しほは味嚼が頼までにさしのぼる、すを過ぎて行く人に乞はばや」とあるは、この微生高が故事に據つたのである。娼婦かるたのこの文は、醋をかふに取つてせせし「その條を見よ)にいひつづけたのである。

すん 二寸より上目なく女稱)

すん あのお男のおなかの臍のすんに印判捺ふたがよいわいの(持統天皇)

すん (體)を説つて「すん」とも「す」ともいふ。體とは年齢などの中心なる柔軟部分をいひ、轉じて物の箇中、胸中をいふ。「瓜のすん」「すん」と、頭のすんきりが痛む(中國地方語)などいふ「すん」も、體の説つた語である。この「すん」を「臍」「寸」などと書くは當字である。「臍のすん」とは、臍の中心のこと。「虎の臍」とは、虎の胸中のこと。「すん切箱」とは、籠箱を胸中から切つた形、即ち先を輪切にした形の籠箱をいふ。

すんばく 此寒氣です白でも起つたか、どれ其す白の蟲捻殺して本復させんと(川中島)

すんふくちや營の笠 (三國志)

すんばくちや營の笠 (三國志) 濡れてすぶくちやの營笠といふを、朝鮮語めがした語譯であらう。

すんぼろぼう 腕も脚も打落し、すんぼろぼうにしてくれん(三國志)

すんぼろぼう (すんぼろぼう)その條を見よ)とも云ふ。蓋し「すべりばすべり」滑倒の「す」を略して轉訛した語であらう。つるつる坊主。すつべら坊主。蘆屋道滿大内鑑第四に、「耳漏かけてこそぞこそすんぼろ坊主すりこぼす」。花山院都興紀海誓願に「雀すりの様にこれんな腹になつた時、よい取合せですんぼろぼう、尼御所への流者。」

せ 戀情け、爰をせにせん蜷川、流るる水も行き通ふ(天網島)

せ 戀情け、爰をせにせん蜷川、流るる水も行き通ふ(天網島)

せ 戀情け、爰をせにせん蜷川、流るる水も行き通ふ(天網島)

づけたのである。新古今集・夏歌の詠、西行法師の歌に「聞かずとも愛をせにせん杜」（杜は山田の原の杉のむらたち）とありて、野村の註に「ここをせにせんとは所詮にせんと也」と見えてゐる。

***せい** 此處で晩まで日暮しに酒にするぢやとせい言ひて（曾根崎）あていこきの太兵衛が浮名を立てていひちらし（天網島）ほんにせいこきの彦さん、然もぶつづつ酔うた足もと、見咎められてはなほ悪口（登門松）

***せい** 高慢げなむだごと。贅澤（せいこき）とは教言。教を言ふこと。
***せい** かつわ あのお子ば二位姫様とて御妹、攝家清華の御方より御望多けれど（西王母）

せいし 「范蠡（はんれい）西施を湖水に沈めしを見よ。
「西施路」は「ころろ」の條を見よ。
***せいし** 観音勢至手を取りて蓮の花に泊らんせ（丹波興作）

花名を藤河那鉢（Mahashanapati）と云ひ、譯して勢至と云ふ。親世音菩薩と共に阿彌陀如来の脇士となり、智恵門を司る菩薩である。

せいじばら 右大辨早廣青侍原に物の具させ（鶴丸）

「青侍原」原は殿原だと云ふ原で、「だちの意」（あをさむらひ）を見よ。
せいすゐ これ與兵衛様、このせいすゐな私を熊鷹の熊手のつかみづ

らのと異名をつけ（卯月紅葉）
「清掃」まじりのなこ。潔白。増補律書集覽に「清掃りみかけ切に見こなり」とあり。
せいせい 木の間に月のもろるか、和光品晶たる中より（酒呑童子枕言葉）

山本九兵衛散（八行本のこの文に「品晶にせいせい」と傍訓してあれども、品晶は「しやうしやう」である。品晶は光明な貌。歐陽修の秋月賦に「品晶盤盤」）
***せい** いたう 奥様せいいたう強きや、御約束も夢となる（鶴丸）新七とやら、いふ手代かたむくろにせいいたう、一門衆町所まで頼んで藏藏に封を付け（淀江）駿河國の殿様より堅くせいいたうにて旅人を改め候へば今川了俊

「政道」公儀から制裁を加へることを云うたのであるが、轉じて禁戒または制裁の意にいま、律書集覽に「政道、禁戒の方にしへり」。

せいだう 清道の大旗羽旄風に吹き靡かせ（唐船船）

「清道」天子行幸の前驅。司馬相如の長楊賦に「且夫清道而後行、中涓而馳、夢漢筆談に「車駕行幸、前驅謂之清道、即古之清道也」。

せい いたか 「こんがらせいいたか」を見よ。
青田の劉伯温 「劉伯温」を見よ。
***せい** ばい この女中に科あればこそ御成敗、汝が罪汝を責む（娘）とともかか、御せいはいと極まりして（丹波興作）他國者に投げられ

ては國へ歸つても成敗、死ぬる命は何處でも一つ（博多）
「成敗」成（なる）は就る、「敗」はやぶる義、政事を

取扱ふにいひ、轉じて刑罰を加へる義となり、更に對して斬棄することを云ふ。
せい ひの覆ひの袂箱（青皮の覆ひ）（吉岡榮）
青皮の覆ひの袂箱（持統天皇）
「青皮」袂箱等の覆ひする厚くて堅い舶來革。
せい ふ 玉樓金殿の中には三夫人九嬪二十七人の世婦（國性爺）

「世婦」君主の左右に仕侍する女官であつて、嬪の次位である。辭源に「世婦、天子有后、有夫人、有世婦、世婦凡二十七人」。

***せい** もんくされば 祈經かばふ心でも誓文くされなければ（百日曾我）誓文くされ明日でも廓を得出でず、居くさりする法もあれ（峠合歌）八百貫目や八千貫は誓文くつされ利なしてやんすといひければ（大經師）

「誓文」誓文くつされとも云ふ。誓文に違ひ偽るに於てはこの身潰れたれぬもすれの義。自誓の詞で、決して偽らぬと云ふ意にあらうたのである。

せい りき 十四貫目横取りして曲事に遭ふ管を、とかくおれが精力で沙汰なしに事濟んだ（淀江）

「精力」骨を折ること。盡力。
せい りやう 「井の中の蛙云」を見よ。

せい ろう 伏欄目の鎧を着、せいろうと云ふ白毛の馬にぞ乗つたりける（大原問答）

***せい** ろう 所所に井櫓矢切を付けて（用明天皇）
「井櫓」やぐら（櫓）。人を登らせて敵陣を偵察する望樓。
***西王母** 我子の爲に捨てし命、東方朔西王母が壽命にもなほ替へば（せじ）持統天皇 西王母が園の桃、百とせ千年の御命（女櫛）これぞ誠に三千歳に花咲き實る西王母の園の桃（西王母）

「西王母」西女である。漢の元封元年武帝の官殿に降り桃實を帝に捧げた。この桃三千年の間に一度花咲きて實を結ぶのみである。云々。列仙傳に「西王母曰、金母也。以中華至妙之氣、化而居於伊川、姓姜、諱曰字婉始、一字大虛……漢元封元年降武帝殿、母進、蟠桃七枚於帝、自食其二、帝欲留後、母曰、此桃非世間所、有、三千年一實耳云云」。漢武内傳に「王母降漢宮、侍女以玉盤盛仙桃七顆、大如鴨卵、形圓色青、母因獻之、以五顆與帝、帝後者前、母問、用此何上曰、此種美欲傾之、母笑曰、此桃三千年一實、非天下所植」。

清和の臺 此處に苟も清和の臺を出で、桃園の御葉末源の牛若丸（孕常盤）

清和天皇の皇子貞純親王の御子經基に源氏の姓を賜はつた。この系統を清和源氏と云ふ。義經はその裔であるによつて「清和の臺を出で」と云うたのである。

せう 扱御鷹はつみ、えつさい、しばせう、隼（このり）百日曾我

「百日曾我」大鷹の雄を云ふ。和名抄に「鷹。大者皆名に保太加、小者皆名動字……俗誤雄鷹謂之元鷹、雌鷹謂之動字」。

せう そよと物音風音に火鉢のせう

の動くなも、心を配つて守りける
(女護島) 三平二満の大口紅、肌の
艶の四十過ぎ、炭にせうの溜りし
如く鹿の子斑の厚化粧(日本武尊)
鍛冶屋の炭のせうどのや、髭の血
筋ぞ隠れなき(唐船囃)

正しくは「じよう(尉)である。老翁(じよ
う)を(じよ)をいひ、老翁の白髪(じよ)をい
ひ、熾火の時を経て白髪となつたものをい
ふ。燃焼した後のふはふはした灰。三題斷作者
評判記(文久三年刊)春通屋久の序文に「三
英等の三題斷は一分線香の煙りと酒、誰し
雪の儘を積、年を累て絶たりしを」とありて
「煙じ(じよ)と振假名が附けてある。

せうがい 病は少し癒ゆるより起
り、孝は少艾より劣る(川中島)
〔少艾〕若い美女をいふ。孟子・萬章上篇に、
「知(好)色則(少)艾(少艾)」。孝は少艾より劣る」と
は、男子が女色を思ふ年配になると孝心の
衰へるものであるとの意。「病は少し癒ゆる
より起り云云」をも見よ。

せうくわん 少光少淨無量天(天神記)
〔少光〕色界二禪天の第一天なる少光天をい
ふ。「色界の十八天」をも見よ。
せうくわん 「ちとくわん」を見よ。
せうげどり 「しよげどり」の條を見よ。
せうごん 「しやうごん」を見よ。
せうざん してそれは小産はし召
されての事かといへば(孕常盤) 懐
妊五月めに小産(川中島)

せうし 不覺の嘆に時移せしが、
あら笑止や何處に立寄り一宿せん

(女夫也) 親仁殿に非業の金を出さ
すが笑止さに、こなた最辰でせつ
くぞや(女殺)
〔笑止〕與のさめること。轉じて、氣の毒。い
たはしいこと。謡曲・鉢の木に「あら笑止や、
又雪の降り來つて候。謡曲・船辨慶に「あら
笑止や風が變つて候。

せうしやう 今宵ならずば明日明
後日、少將程通うても叶はぬ間ば
叶はぬなり(雪女) ももならず私や
小町、お前は四位の少將と、車の
榻に抱付く(最明寺殿)
〔少將〕深草四位少將を云ふ。小野小町に懸想
して百夜通ふことと約し、その通つた度歌を
車の榻に刻んだが、九十九夜まで通うて今一
夜といふ時になつて死し、遂に思を果すこと
が出来なかつたと云ふ。このこと謡曲・卒塔
婆小町などにも見えてゐる。「深草の少將」を
も見よ。

瀟湘の夜の雨 篷窓雨したたりし
彼の瀟湘の夜の雨も、これにはい
か勝るべき(百合若)
瀟湘は支那湖南省を流れてゐる二水の名。湘
水は洞庭湖に注ぐ(九江)にて、永州府の北を
過ぎ、瀟水に合流するあたりを瀟湘といひ、
所謂瀟湘八景の一つ也。夢溪筆談に「度支
部員外郎朱遵功畫、尤善爲平遠山水、其得
天壽畫、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁行
夕陽、謂之八景、好事者多傳之。

せうしん 姉の連合ひ彦九郎殿留
守の事なり小身なり(堀川波鼓)
〔小身〕身分卑し武士で秋篠寺者。

せうするこかう 我こそ大草香の臣

が成る果と、いふ聲ばかりは彷彿
として憔悴枯槁の木の葉衣(浦島)
〔憔悴枯槁〕衰へて枯木の如くなれるこ
と。風原の漁父辭に「顔色憔悴、形容枯槁」。
せうち 親兄どもは小知を取
り(薩摩歌)
〔小知〕少しの知行。少しの扶持米。

せうと、この北の方の御せうと
右大辨早廣この體をきつと見
て(鶴丸)
〔せうと〕兄人の音便。兄。合類大節用集に、
「本朝俗、兄弟姉妹相謂爲(背)人」。
せうど 「しやうど」を見よ。
せうれつてい 古の照烈帝に關羽
の添うたる如くなり(天神記)
〔照烈帝〕支那三國時代蜀の皇帝で、即ち劉備
字は玄徳、前漢景帝の後裔である。

せがい つまくなゐの楡扇を船の
せがいに挟みて(加増曾我)
〔背〕船の兩脇の總名である。和漢船用集巻
十に「せがい。船の兩脇の總名也。萬葉集巻
三、雜歌部に、武藏の浦をこぎたむ小舟葉扇
を背に見つともしき小舟と讀る、背の字用
ソガイと讀めり。セリ通音なり、背の字用
へ」。平家物語巻十一、那須與一の事の條に
「産紅の扇の日出したるを船のせがいに挟み
立て」とあるも、兩脇なる船楫である。

せかいらぎ 小川通のせかいらぎ今
日明日に持たすやれ(女腹切) 夫
が差替三尺二寸の香かいらぎ、鶴
鶴差にばつこんで(待統天皇)
〔香梅花籃〕皴皮襪機(天明五年刊)に「香カイ
ラギは普通通りにすうと地より大きな粒の
か頭より尾まであるが故に、香カイラゲとい
ふなり、長さ三尺より六尺許もあるものな

り。概に香梅花籃を巻いて作つた刀。
せがむ 年切増のものがりごと急急
にせがむと見えた(長町女腹切) 菱
屋の花代、津の國屋の料理代、合
せて三百四十五匁、扱も扱もせが
まれます(二枚槍)

せかんろほふ 施甘露法線掛け責掛
け祈誓ある(養徳天皇)
〔施甘露法〕六道の衆生を解脱さす爲に、咒を
唱へながら結ぶ印契である。朝自に養徳隨心
咒經に、「施甘露印第十七。以左手頭指與
大母指相捻、餘三指直堅向外託、又以三右手
一垂臂向上下直舒、五指向上下垂、作此施甘露
法、六道衆生悉皆飽滿、離苦解脱、誦見咒」。
せき 手詰のせきを勝軍(國性齋)
〔持〕國石にて、雙方互にせめ固んだとき、先
そに石を下す方の不利な場合に、其儘に捨
置く場所を云ふ。

せきこう 學はずして石公孫吳の
兵術に通達し(川中島) それ柔よく
剛を制し、弱よく強を制すると
は、張良に石公が傳へし秘法な
り(藝林太本記)
〔石公〕黄石公をいふ。三略の書は黄石公の撰
であるとの説あれども實は偽書である。「く
わらせきこう」を見よ。「石公孫吳」の「孫吳」
は孫武と吳起を云ひ、共に支那上代の兵法家
である。

せきぞろ 座敷は善哉・庭にはせき
ぞろ夕曇 或は巡禮・古手貫・節
季候に化けて家家を覗きのからく

り。概に香梅花籃を巻いて作つた刀。
せがむ 年切増のものがりごと急急
にせがむと見えた(長町女腹切) 菱
屋の花代、津の國屋の料理代、合
せて三百四十五匁、扱も扱もせが
まれます(二枚槍)

と云ふ事を盲目でさへ知つて居る(卯月潤色)

漆の刷枝から掻取つたままの液で、物を接ぐに粘り強い上品な漆で、出羽下野地方から産出する。

「せしめうるし」一番に首をせしめ漆と勇みななし(百合巻)

「せしやう」此うゆ手にばせしやが参り(反魂香)

「せしやう」釋の空海と申せしば讃岐國多度の郡、父のせしやうは佐伯氏、母梵僧を夢みてより寶龜五年に誕生あり(以呂波)

「せせかひ」お土産召せ召せ、二見せ貝・伊勢若布(國性爺後日)



貝所産

「せせはん」露長なせにせせはん、もうみどあぐるぞ(浦島)

「せせらぎ」小鮎さばしるせせらぎにかだみて(大磯虎)

和訓栞に「せせらぎ。せせはままと通ず、小の義也、水の穢く流るる所をいへり。」玉島川にあらねども云云を見よ。

「せせる」ところと寝よとすりや後からせせるやら、前からは毛の生えた大きな足を出出すやら(女腹切)

「せそんじやう」世尊寺様の走り書き(川中島)

「せせたく」母の前へも面出しせず、何故姪を水責め、わかせぬかせとせたり(井筒)

「せちが」おのれもせちがな奴ぢやもの、銀も見すにあたたかに請取をせうけい(世智賢の略)

「せせちべん」始末算用世智辨も、人に

「世智辨」ははきこと。倍惜。世智は處世の才または俗人の意、即ち儉約なこと。下學集に「世智辨。世俗倍惜之義也。諺に「世智便。下學集。世智便。世俗倍惜之義也。沙石集に洛陽に或女房世世かき世智愚なるあり。此字佛書に出たり、所謂備智權智小智世智便也。眞實の智は圓鏡平等觀察成作。此を佛の四智と云。」

「せつちかん」いや禮儀を存じたる故にこそ、返事を奪取り飛脚にもせつかんを加へ候(源義經) 繼父なればない苦なれ、子を折檻するに遠らうとしたが、雲隠を離れて動かない爲に、檻が折れたと云ふ故事から出たものであると云へど、或は切腹の音讀か。合類大節用集に「折檻。見漢書。非之謂。前漢朱雲傳。折檻之事實。見漢書。日記故事。和訓栞に「せつかん」折檻と書けり、朱雲が故事漢書に見えたり、又切腹の義あり。

「せつき」無常のせつき身を離れず、煩惱業苦に日を送らせ(釋迦)

「せつしう」某こそば雪舟の嫡傳とし

て代々の御扶持人(反魂香)

「せつしや」本社(九郎判官の宮、攝社)は所撰の義であつて、古くは所撰社とも書いてある。本社境内にあつて、本社と本社との中位にある社格である。

「せつたいていせつめい」二人は絶體絶命の擲合ひ組合ひ(女殺)

「せつちやうせい」酒頭童子が其處除けの茨木童子がつかみつら(酒吞童子) いやといふとそれ切りと、振上げ振上げせつちやうす(天神記)

「せつな」一瞬刹那が其間に忽ち安養無垢世界不退快樂の都に到らん(釋九)

「せつしや」切所難所の六里半(倉橋出)

「せつしや」切所難所とも書いてある。難所を云ふ。下學集に「節所。難所也。」

「せつしや」切所難所の六里半(倉橋出)

單位で、一時よりもなほ短小な時間を云ふ。西域記に「時極短者謂利刹也」。

*せつば 胸おし開けば九寸五分肝先。に切羽まで(堀川波鼓) 勘十郎殿先刻にから切羽鉦する通り、金渡したら御損であらう(歌念佛)

〔切羽〕刀の鑿の両面に着き、一つは柄に當り一つは鞘に當る所に添へた薄い金具の稱。〔鉦〕は鑿元を固める金具である。〔切羽鉦する〕とは詰開きするといふ意の洒落詞である。

*せつり (百日曾杖) 女護國(賀古教信) 〔利刹〕利刹の略で、梵語Kalyanaの訳である。印度人族間に於ける四種の階級(婆羅門・刹帝利・吠舍・首陀)中の第二位にあつて、王種及び軍人の階級である。

*せつろく 伯叔の帝に攝籙の臣として(聖徳太子) 〔攝籙〕攝録とも書いてある。天皇に代つて萬機の政を統へ掌ること。日本書紀・推古記に「立三廩戸豐聰耳皇子一爲皇太子、仍録攝政、以爲萬機二番委焉」。

*せと 止めう止めうと思ひしが、これ程の瀬戸が無うてうかうかと盡した(重井筒) 狹門の義。さしまつたこと。さしまつた場合、瀬戸際。

*せとのそめいひ 〔瀬戸波鼓〕瀬戸は駿河國志太郡にありて、島田町と藤枝町との間にある小邑である。瀬戸はこの地の名物である。東海道名所記に「瀬戸の波鼓は此所の名物なり、その形小判ほどにして強飯に山柀子をぬりたり、うすきものなり」。東海道名所圖會・四に「瀬戸。島田より一里許先(東)にあり、……、名物波鼓瀬戸村の茶店に賣るなり、強飯を山柀子にて染め



〔昔瀬戸の波鼓の袋に捺した印影〕

り一里許先(東)にあり、……、名物波鼓瀬戸村の茶店に賣るなり、強飯を山柀子にて染め

*せな 親もない身、大事のせなの友達(女護國) 女より夫を親しんで呼んだ稱。和訓栞に「せな。萬葉集にみゆ。東長をも夫をいふなり、兄名の義なるべし、東國の俗今も兄を稱せり」。

*せにだいにこ なる慾市殿その拍子では知られぬ、錢太鼓の三味線知らずば知らぬと頭か言うたがよい(博多) 私ども二人錢太鼓稽古して居たりや(博多)

〔錢太鼓〕扁圓な小さき太鼓。好色二代男貞享元年刊巻一、酒中の見ぬ初夢の條に「此所(六角堂)は酒中の見ぬの條に遊ぶ所なり、錢太鼓、唐人笛、竹馬の鈴の音、もの騒しき中へ。嬉遊笑覽巻下、兒戲に「錢太鼓、唐人笛」(語聖大鑑)貞享此處は酒中の乳の人の集りあふ所なり。錢太鼓唐人笛のひびき竹馬の鈴の音云云、小きを鏡に響へていふは錢太鼓、錢太鼓の如し、今豆太鼓といふも同義なり。果林子のここの文

は、禿二人が錢太鼓の音に合して唐人踊の格古をしてゐたのを、笠市が三味線を弾いて邪魔をしたのである。

*せにまた 駕籠賃(山田まで) 錢股ぢや、御合點でござるか、むむそれば鳥目のことか、鳥目は持たぬ(百合老)

〔錢股〕駕籠昇の鞆の符號語で錢二百文。俚言集覽に「駕籠鞆助が詞に二をマタと云」。

*せね せれの濟むまで是を取れと鎧の柄に紐付き(夕霧) この頃も彼の君がせれを十六枚つん出いて(加増曾杖)

*せびらかす 節季節季にせびらかし(安腹切) 今日鳥屋で彼の田舎のうてすにせびらかされて頭が痛い(冥途飛脚) 守屋が妻にせんと兄の靱負をせびらかす、辛氣な事ばかり(聖徳太子)

〔せびらかす〕強請り責める。衫襦子(妻保五年刊巻一に、明くは水を汲み新をになひ、靱の下をせびらかすよりまじごととして、靱の下をせびらかす)又は「せぶらかすといひ、あざける。からかふ。ひやかすなる意に用ひる」。

*せぶる 公時躍出で、女郎せぶつて掴取つた一步小判の金が罰覺えたかと、こんとくらばす頭の鉢(酒吞童子) 町屋は家並・門並、百姓は頭數にせぶり取り吸取り(唐船舞)

*せまくら 變る瀬川・沈む淵、思ひ二つの中町や(救繪)

〔瀬川瀬川〕高き處をいふ。尾張家巻に「石ばしる初瀬の川のみまくら云云」の歌の註に「この頃の文章に、川のながれの早きを瀧打てぞながれける」とへる事あるは、瀬にあたりてわかへる事と聞えられた。和訓栞に「せまくら打つなど云ふは、速瀬の波の流をちかへす打つをいへり」。

*せみをれ 蟬折の一管と共に形見にたひ給ふ(孕常盤) まだ音も慣れぬ蟬折の、一よ重れしつまつま琴や(冷泉節)

〔蟬折〕鳥羽院の御時唐土から渡つた笛で、琴竹にて造り、その竹の節恰も蟬に似てゐたのを、高松中納言實平がこの笛を吹いた時蟬を打折つたによつて、蟬折と名付けたと云ふことが源平盛衰記に見えてゐる。

*せみをれ 千松鬚五分一・せみをれ。かものばし(加増曾杖) 新時代の淺翠、翡翠の縞子鬚、蟬折の儀に感ある美男(五人兄弟)

〔蟬折〕鬚を反折して蟬の形をした男子の結髪。

*せめらま 六十餘州の武士の司、御遊とならば笠懸犬道物責馬などこそあるべきに(千疋犬) 達者を見せてせめ馬の、鞍も鏡も汗になりに(雞權三)

〔賽馬〕馬を乗りならすこと。嬉遊笑覽巻四、武事の條に「賽馬、馬を乗りならすを賣ると云ふ」。武遊傳実記巻八に、「我が買ひたる馬……、小松馬場にて賣べし」。



〔折蟬〕

ふ尤もと胸にこたへしより、房が大事をばつたりと忘れたり(重井節) おやちとのせりふなら、何處ぞ外でしたがよい(女腹切) あれあれ悉達太子様、あのものものせりふなし、ひつたりと抱付いて一度手なみを見せ給はば(舞臺) その非筒屋にわれが今、重井筒と篠塚に、言はれいばあの牛四郎、憂ひせりふのあやめぐさ(重井節)

「せりふ」(舞臺)の約であらう。理窟をいふこと。狼花方言に「せりふする。一理屈いふこと」。歌舞役者が舞臺で互に述べ合ふ詞を「せりふ」と云ふ。舞詞と舞は舞臺詞の略である。「せりふ」の稱は、南都論議のせりふより起り、狂言や芝居にも言はれる語となつたのである。

*せん あれ一錢取らせといひけれ
「錢」(一)貫の千分の一。和訓祭に「錢もんめといふは文目の義、錢文より出たり、今文字をよむは錢の省文なり」。(又は錢の古體ともいひ、一説に文字の草書と片假名のメとの合字ともいふ。)

*善惡不二・邪正一如 (國性爺後日)
法性の理に順ふを善と云ひ正といふ。法性の理に違ふを惡といひ邪といふ。善惡邪正はその別あるに似たれども、その本體から觀れば何れも法性を出ないのである。即ち不二また一如である。謡曲山姥に「ちや善惡不二、何をか恨み何をか喜ばんや」。「じやしやうちせんに見よ」。

せんかう 今日(二十七日)先考滿仲

の御命日(開八州)
〔先考亡父。禮記に、「生日父母、死日孝」〕

*せんき 鰐香背殿の腰の廻り御見
舞申せし疝氣の神(福祐姫)
〔疝氣漢方の病名。男子の大小腸または腰部などの痛む病氣で、その痛み足に下ることもあり、また鰐丸が痛み眼れる時は快方に向つたものとされてゐる。治療法として昔は、橙實や、ぶじ(その條を見よ)・三里(その條を見よ)に灸、鍼などを用ひた。〕

*せんぎ 公卿僉議にも及げず(國性爺)
〔舊會齋語〕「彼は廣韻・集韻・韻會・正韻に、(皆)威、威也、衆共言、之也」。

*せんきゆう 自體我等はせんきゆう持(薩摩歌)
〔川邑藥草の名。繖形科に屬し、高さ一二尺に成長し、葉は芹に似て香氣強し。この文は川苧に疝氣をいひかけたのである。〕

せん金の吟
「宣風坊の北云云」を見よ。
千貫枝 慮外千萬千貫枝筆捨枝や(反魂香)
千貫に直する程な姿勢よき松枝を云ふ。蓋し伊勢に千貫松と云ふ木名があるので思付いた語であらう。

せんげ 先年丁海和尚衆生濟度の説法を此所に説き始め、今遷化の跡までも我が親は講中の第一にて(香度申)
〔遷化他土に教化を遷す義、僧侶の死去を云ふ。大乘義疏に「善後時遷化他土」〕

せんけん うば玉の鬢の黒髪、嬋妍

たる鬢も時の間に刈捨て(開八州)
〔嬋妍「美好。謡曲幸都婆小町に、「嬋妍たりし鬢髪も」〕

せんけん これ天人の住家にて善現
善見色究竟(天神記)
〔善見色界十八天の一で、四禪天の中にある。妙に十方世界を見て、塵垢なきが故に善見と云ふ。〕

せんげん これ天人の住家にて善現
善見色究竟(天神記)
〔善見色界十八天の一で、四禪天の中にある。空にして障礙なく、精しう現前を見るが故に善現と云ふ。〕

*せんざい ますます全盛座敷はゼンざい、庭にはせきぞるこりや又目出度い(分懸) 一昨日のお日待に法印様の相伴で、善哉餅を十三杯(當年草)
〔善哉餅〕の略。つぶしあん汁粉。

*せんじやう そこの橋の下・新七はあやわらかと、口合・わる口・せんじやうはり、どつと笑うやう言ふ(遊懸) 色里でせんじやう言ふことは治兵衛めには叶はれども(天網鳥) さる程に三千人の責子も者、二三日前から仕過しの、借上はまつかへさま巾着振ひ底を叩いて、これで御免と詫びるもあり(會稽山) 後夜の太鼓を打つ時は、借上減法とそやして(扇八景)

せんたい 外道せんたいの施物を受ければ三惡道に墮つ(龜迦如來)
〔闍維〕一闍提(梵語 Uchāhika) の略。佛法を誹毀して因果の理法を信じない者を云

安國曰、借上無禮、國之凶賊なりと有。「借上減法」とあるは「最生減法をきかせたのである」、「まづ初夜太鼓云云」を見よ。

せんじゆせんけん 不空羅索千手千眼、願くは千の眼を顯はし(蟻賊天皇)
〔千手千眼千手千眼觀世音菩薩の略。六觀音の一であつて地獄道の能化者である。〕

せんしゆのしんごん このたび小松様の御願の爲、千手の眞言(孕常盤) 唱へ込みたる大事の珠數(孕常盤) 〔千手眞言眞言〕は陀羅尼(Dharani)のことである。次條を見よ。

*せんしゆのたらに 珠數さらさらと押採んで、眞讀の普門品千手の陀羅尼を繰掛け繰掛け祈らるる(天神記) たゞ引けや手手に千手の陀羅尼(用明天皇)
〔千手陀羅尼千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼の略で、大悲咒とも略稱し、伽梵達摩譯の千手經に説く所であつて、咒語八十二句ある。「たらに」を見よ。〕

せんしやう 運の盛り刻限先勝の時
到れり(と堀川波紋)
〔元勝陰陽家にて、正七月の17 15 19 25、二八月の6 12 18 24 晦日、三九月の5 11 17 25 29、四十月の4 10 16 22 28、五十一月の3 9 15 21 27、六十二月の2 8 14 20 26の日を先勝日といひ、急用又は公事沙汰などに適すとす。近松のこの文は、時刻に轉用したのである。〕

ふ。合類大御用集享保二年刊に、蘭境、梵語唐翻云不信、蓋不信佛法之義。南本涅槃經に「一聞不信、提名不信、信不具故名不信提」。二、開提。

仙臺の坊様 此處へ見える坊様は、の暖なに紙子着て、仙臺のぼん様か(丹波與作)

仙臺から産出する紙子を仙臺紙子と稱して仙臺の名物である。この文は、紙子から仙臺紙子を思付いて、仙臺の坊様かと聯想したのである。日本山福名物調繪卷四に、「仙臺紙子。地紙強く能く揉みぬきてしとゆる故、柔かして懸よし。巽州は木綿少故、中人以下は多く紙子を著る、云云。

*せんたう おのれらば心得ぬ、せんたうの湯屋に鍔を着し隠れ居て、違うたとは何が違うた(鎌田)

せんたう 善導か法然の化身であらうと申した(薩摩歌)

*せんだつ 虎若は日頃懇に語らひし山伏の雲居寺にありけるが、先

仙臺の坊様——せんばふ

達の装束借りて着用し(一四五戒魂) 俗體ながら数度のお山、院號請けたる若手の先達(女殺)

せんたうらげ 我が身はいかに如何なれば、他生の縁も薄紅の濃紅に色見せて、なに梅陀羅維甲斐もなき(釋迦)

*せんだん 吹出す烟は沙羅林梅檀の霞と變じ(歌念佛) 五蘊離散して梅檀の烟に伴ふ(實古教傳)

*せんだんのいた その出立ち紫末濃・せんだんの板・かむりの板(女權)

*せんたう 受けつ開いつ火花を散して、こゝなせんとと勵みしが(今川了俊) 切先を揃へてこゝなせんとと戦ひける(佐佐木) 文盲不仁の惡黨ゆゑ先達の官職にも進まず(松尾)

せんばふ 織法回向の秘密の書

も袖を小さくしたやうなものである。上なる板を冠板と云ひ、次の細きを化粧板の板、裾なるを、菱織の板と云ふ。

*せんちしき 二人に枕を交はすまいと思ひそめたが善知識、髮容つくつてさへ高の知れた姿が嬈織、衣を墨に頭を圓め(薩摩歌)

*せんぢやう 禪定觀念(用明天皇) や暫し禪定三昧に入り給ひ(釋迦)

*せんたう (三國志) 女權(烏帽子折)

せんひ 鎌倉の御堂所先妣松下禪尼の風を慕ひ(最明寺歌)

せんばふ 織法回向の秘密の書

留仙洞號華陽二とありて、仙人の居所を云ひ、轉じて上皇の宮殿または太上皇のことにも云ふ。

*善の綱 佛の御手の善の綱、二條三條これと飛ばば、十三歳の短夜や息を引くる善の綱(實古教傳)

*せんばい あれが此處へ出てくれば、今の詞で千ばいちや(萬年草)

せんひ 鎌倉の御堂所先妣松下禪尼の風を慕ひ(最明寺歌)

せんばふ 織法回向の秘密の書

せんばふ 織法回向の秘密の書

